

アジアの漫画100点が 国際理解教育の教材になった

『マンガアジア』 (MANGA+ASIA)

おおしま さち
大島 幸

ジャパンファウンデーション
芸術交流部舞台芸術課主任

「アジア漫画展」の作品を
用いて授業をつくる

2008年3月、ジャパンファウンデーションと財団法人名古屋国際センターにより、国際理解教育教材『マンガアジア (MANGA+ASIA)』が刊行された。

この教材は、ジャパンファウンデーションの05〜06年度社内事業公募制度、先駆的・創造的事業「基金を開けよう——JFリソースを活用した国際理解教材の開発」の一環として、国際文化交流事業を通じて蓄積した素材やノウハウ等を生かして国際理解教材を開発しようとする取り組みに、名古屋国際センターが共鳴する形で制作が行なわれたものだ。

国際理解教育教材『マンガアジア』の表紙(左)とモデルプログラムを紹介したページ(下)。使用する漫画と学習のねらい、プログラムの進め方などがまとめられている。絵は「時として協調を欠く」(中国) 徐 鵬飛





「第11回アジア漫画展」は海外を巡回中。アジア各国の漫画家10名が「アジアの若者文化」をテーマに制作した計77点を紹介。写真はスラバヤ(インドネシア)の会場にて。2008年6月

「マンガジア」開発の始まりは、06年7月に東京都武蔵野市で開催された「夏期教員ワークショップ2006」(注)で、ジャパンファウンデーションが分科会の一つを担当したことにさかのぼる。分科会実施のために、同年6月から、武蔵野市国際交流協会、教職員、NGOスタッフからなる同ワークショップ実行委員会との打ち合わせに、私も数回参加した。

そのなかで、ジャパンファウンデーションが1995年から11回にわたり開催した「アジア漫画展」作品の教材としての可能性が話し合われ、写真を使用した参加型学習である“photo language”を発展させ、“cartoon language”とし

ての授業づくりに着手したのがきっかけとなった。

武蔵野市の教員ワークショップでは、まず「漫画作品を授業で提示する一例(手法)」のデモンストレーション、その後、漫画作品を用いて「学習指導案を作成する」活動を設定した。参加した教職員の方々の積極的な関与により、ジャパンファウンデーションのリソースに対する多種多様な観点を再確認し、また学校現場でのさまざまな導入方法を検討することができた。また、小学校・中学校・高等学校での学習指導案を作成するに至り、そのリソースを学校現場で活用するまでに具現化できた初の例となった。

漫画の教材としての可能性をワークショップで考える

この教員ワークショップには、ジャパンファウンデーションが国内ネットワーク構築の一環として連携している愛知県名古屋市から、大きな関心を寄せていただいた。まず、06年10月に各国際交流団体が参加する「ワールド・コラボニェスタ2006(愛知県名古屋市中にて開催)」で、ジャパンファウンデーションによる「国際理解の授業づくりワーク

ショップ」が1時間行なわれた。

ワークショップ会場はフェスタ会場の一角に作られたセミナースペース。これまでに作成した教材をもとに、さらに当日の環境を考慮し、パワーポイント(プレゼンテーション・ソフト)を使ったIT教材として、参加者の視覚に訴える新たな教材を作ることにした。そして、セミナースペースに集まった参加者が「①漫画作品を教材として使用する手法」を体験し、「②漫画作品を使うメリット」や「③実際の授業でどう使えるか」を考える構成とした。ワークショップには、一般の参加者に加え、地元愛知県や名古屋市で国際交流活動を担う人が集まり、この分野への関心の高さがうかがえた。

その後も、07年2月には「国際理解教育セミナーE」なごや」での分科会をジャパンファウンデーションが担当した。午前中の分科会では、ワークショップを行ない、午後の全体会では、ワークショップ参加者自身に教材の使い方などのプレゼンテーションをしてもらった。これにより、この漫画を使った教材が、教員だけでなく授業経験のない人でも扱うことのできる教材であることを実証することとなった。

注。武蔵野市国際交流協会主催による国際理解教育のためのワークショップ。2006年度は「地域に暮らす外国人やNGOとの協働をめざして」学校と地域がつくる国際理解教育」をテーマに行なわれた

そして、07年4月より、名古屋国際センター、愛知県国際交流協会、JICA中部、NIED・国際理解教育センターと関係団体連絡会を構成し、1年をかけた『マンガジア』教材開発が本格的に始動することになったのである。

約700点の作品を精査して14のモデルプログラムが生まれた

『マンガジア』では、これまで「アジア漫画展」に出展された作品から、ジャパンファウンデーションの事務所が置かれたインド、インドネシア、タイ、韓国、中国、フィリピン、マレーシア、日本の計8カ国の厳選された1000点の漫画作品を使用している。そして、『マンガジア』を使用することで達成される「5つの学習のねらい」、「6つの学習テーマ」、およびマンガを使ってアクティビティー（学習活動）を作るための「7つの手法」を設けている（図参照）。

これらの漫画作品の選定、学習のねらい・テーマの設定、手法の開発は、決して恣意的に考えられたものではなく、関係団体連絡会メンバーが「アジア漫画展」11回分の全作品（約7000点の一点一点を何度も精査し、「どの切り口で扱える作品か」「どの手法が取り入れら

れる作品か」などの数々のデータ集計を重ねた結果、決定されたものである。

こうして作られた、漫画作品、学習テーマ、手法を組み合わせた14の「モデルプログラム」は、1つのモデルのなかに、さらに、「基本編」「発展編」「時短編」の3つを表示することで、学習テーマや切り口、参加者のレベルや関心、授業の位置づけや学習機会に合わせて柔軟に対応できるように配慮されている（囲み参照）。

また、教材の使用者（教員にかかわらず授業経験のない人も）が授業をしやすいように、国際理解教育の具体例や用語集なども巻末に掲載し、使いやすくなるための工夫が凝らされている。

そして、『マンガジア』開発の発端が、武蔵野市や名古屋市でのワークショップで参加者の声から醸成された教材であったように、制作過程でも、機会をとらえてはトライアル（試行）を実施し、実際の教材使用者の感覚を常に意識し、教材中に反映させようとしたことも申し添えておくべきであろう。07年6月には「アジア漫画展」愛知県巡回に合わせた教材PRセミナー、同年8月には愛知県内教員研修でのワークショップなどが開催され、そこで得た参

モデルプログラムの一例

モデルプログラムでは次のような「基本編」「発展編」「時短編」が例示されている。

「基本編」はテーマ理解及び問題への気づきを促すプログラム。所要時間は30分～1時間程度。「発展編」は基本編とのセットで使うことで、さらにテーマ理解を深めるプログラム。所要時間は1時間半～2時間程度。「時短編」は授業の導入、協力作業の練習、話し合いの活性化（ブレインストーミング）などで、手軽に使えるプログラム。所要時間は15分程度。

例えば、モデルプログラム「なんかヘンだぞ?（その2）」のテーマは格差。「時短編」は右の2点の漫画を順に見せ、何がヘンかを考え、共有する。「基本編」では、漫画を見せる前に、人間が生きていく上で共通に必要なものを考えてグループで共有する時間をとる。「発展編」では、さらに参考資料を使い、自分に何ができるかを各自が考え、グループ、次に全体で共有する。

モデルプログラム「なんかヘンだぞ?（その2）」で使われている漫画
〈上〉「輸入量と同じ量を捨てている国民です!」（日本）クミタ・リュウ
〈下〉「やせる矛盾」（インド）Shekhar Gurera



図：『マンガジア』による
学習の特徴

6つの
学習テーマ

- 1 アジア各国事情
- 2 環境
- 3 IT
- 4 格差
- 5 ジェンダー
- 6 文化／価値観／豊かさ

5つの
学習のねらい

- 1 多様性と同一性を理解し、多様性受容力を高めよう
- 2 ステレオタイプから離れ、新しい関係を築こう
- 3 グローバルな視点から、日本や自分をふりかえろう
- 4 わたし・日本・世界のつながりに気づき、より良いつながりを築こう
- 5 共に学び、共に考え、共に生きる力を育てよう

マンガジア

7つの手法

- 1 内容を想像する・表現する
- 2 特徴や課題を読み取る・深める
- 3 対比して考える
- 4 前後の展開を考える・表現する
- 5 部分を変更する・置き換える
- 6 一部から想像する・複数から推し量る
- 7 分類する・優先順位を考える

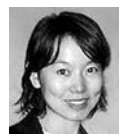
以上、『マンガジア』完成に至った過程について述べてきた。「アジア漫画展」という既存の主催事業が、ジャパンファウンデーションのリソースを再活用する。というパイロットプラン（先駆的事业により新たな視点・可能性を持ち、さらにジャパンファウンデーションが日ごろより取り組んでいる国内連携促進事業と連動して成長した事業例として、多く

加者からの積極的な反応に、関係団体連絡会としても『マンガジア』の力を実感することができた。

* * *

の発見・示唆があったものと感じている。『マンガジア』は現在、市販という形を取っておらず、名古屋市の全中学校・高校、および全国各地国際化協会加盟団体などに配布されている。また名古屋国際センターでは08年度、同教材を使用した事業も実施されている。今後、この『マンガジア』が国際理解・異文化理解に関心をお持ちの多くの方に、国際理解への入口の一つとして活用されることを願っている。

国際理解教育教材『マンガジア』
発行・制作：財団法人 名古屋国際センター
独立行政法人 国際交流基金（ジャパンファウンデーション）
編集協力：財団法人 愛知県国際交流協会
独立行政法人 国際協力機構 中部国際センター
執筆 O.T.P.：特定非営利活動法人 N.I.E.D. 国際理解教育センター



おおしま さち ● 津田塾大学学芸学部英文学科卒業後、埼玉県公立高校英語科教諭として教材開発等に携わる。2006年よりジャパンファウンデーションに勤務。海外公演・舞台芸術情報交流事業などを担当